

本がいっぱい!



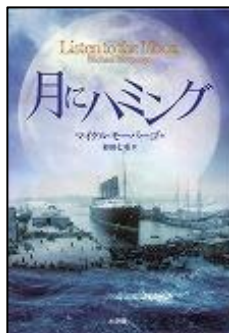
Teen's 2016



『月にハミング』《Fモ》

マイケル・モーパーゴ／作 杉田七重／訳 小学館

第一次世界大戦中、イギリスの孤島で、アルフィはやせこけて今にも死んでしまいそうな少女を発見し、家に連れ帰る。少女が持っていたのは、ドイツ語が書かれた毛布とテディベア。しゃべった言葉は「ルーシー」の一言だけ。この少女はいったい何者なのか、どこからきたのだろうか?



『ワンダー』《Fパ》

R. J. パラシオ／作 中井はるの／訳 ほるぷ出版



ぼくの名前はオーガスト。来週から中等部の普通の男の子、といたいけど周りの子と比べて外見がすごく変わってるんだ。そのせいで学校に通うのも生まれて初めて。そんな僕を待ち受けていたのは予想通りの冷たい視線。でも、素晴らしい出会いもあったんだ。

TOKOROZAWA PUBLIC LIBRARY
所沢市立所沢図書館

がんばれ! Teen's!!

『うたうとは小さいのちひろいあげ』《YFM》

村上しいこ／著 講談社

高校生の桃子には、いじめが原因で不登校になった親友がいた。自分もそれに加担してしまったことに苦しんでいた桃子が、ひよんなことから短歌を詠む「うた部」へ入ることに。本当の自分を表現できるうたに魅了され変わっていく桃子。やがて親友との関係にも変化が…。



『あと少し、もう少し』《YFセ》

瀬尾まいこ／著 新潮文庫

中学生生活最後の駅伝大会。陸上部部長のおれが集めたメンバーは、いじめられっ子や金髪の不良、変わり者のサクソ奏者など。おまけに顧問は、陸上素人の美術教師。1人1人の思いをのせた襷を繋ぎ、県大会に出場できるのか。



『いのちのパレード』《YFヤ》

八束澄子／著 講談社

親友から突然妊娠を告白された万里。同級生からは、姉の赤ちゃんの誕生と死を知らされる。万里自身にも、生まれることなく亡くなった姉がいた。万里も友達も家族も、どんな思いで、「命」に向き合っていくのだろうか…。



『大人になるっておもしろい?』《Y15》

清水真砂子／著 岩波書店

「親、教師…大人ってみんなムカツク!」と思っ
ていませんか? でも、ムカツいていたって何にも
ならないから、ちゃんと怒ろう。「え? ムカツクと怒
るは同じことでしょ?」いえいえ、全く違うんです。
どう違うかは、この本を読んでみて。大人になるの
も悪くないかも。



平和について考えてみよう！

『走れ、走って逃げろ』《Y Fオ》

ウーリー・オルレブ／作 母袋夏生／訳 岩波書店

第2次世界大戦下のポーランド。ナチス・ドイツがユダヤ人を迫害する中、一人ぼっちになった8歳の少年スリックはゲッターから逃げ出す。ドイツ兵から逃れ、農村と森を放浪する過酷な状況で、スリックは片腕と過去の記憶を失うが…。



『ぼくたちに翼があったころ』《Fシ》

タミ・シエム＝トヴ／作 樋口範子／訳
岡本よしろう／画 福音館書店

孤児院で体罰を受け、足が不自由になったヨセク。そこを逃げ出したヨセクは、コルチャック先生が運営する“孤児たちの家”で、生きる希望と自分の夢を見つけ成長していく。第二次世界大戦前のポーランドに実在した孤児院を舞台に描かれた物語。



『夢へ翔けて』《76》

ミケーラ・デプリンス エレーン・デプリンス／共著
田中奈津子／訳 ポプラ社

シエラレオネの内戦で両親を失ったミケーラ。孤児院で暮らす彼女の心の支えは、ピンクの衣装で踊るバレリーナの写真だった。その孤児院も襲われ、ギニアの国境へ逃れたミケーラは、やがて優しい養父母に引き取られ、アメリカでバレリーナを目指す。



『ガザー戦争しか知らない子どもたち』

清田明宏／著 ポプラ社《30》

空爆におびえ、がれきの中で暮らす子どもたちがいる。想像してほしい。家を奪われ、将来が見えない不安を。世界に目を向けると何が見えるだろうか。

『ぼくと象のものがたり』《Fケ》

リ・クリ／作 若林千鶴／訳 鈴木出版

妹の治療費を返すために、象の世話係になったハステイン。雇い主にこき使われながらも、違法に捕えられた子象ナンディタを守ろうとするが…。

異世界を旅しよう！

『獣の奏者 1 闘蛇編』《Fウ》

上橋菜穂子／作 講談社

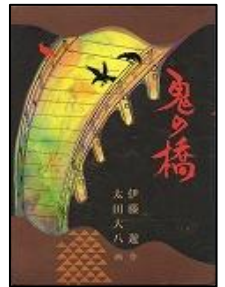
エリンの村では、他国の侵略から国を守るため、人間を襲う凶暴な獣・闘蛇を育てていた。ところがある日、闘蛇が何頭も一度に死んでしまった。獣の医術師であるエリンの母は、その責任を負って処刑されてしまう。ひとりぼっちになったエリンは…。



『鬼の橋』《Y Fイ》

伊藤遊／作 太田大八／画 福音館書店

貴族の少年・篁は、妹の死は自分のせいだと責めていた。妹が亡くなった井戸をのぞきこんだ篁は、いつのまにかあの世との境の河へきてしまった。すると恐ろしい鬼が2匹、篁を食おうとあらわれた。そこへ助けにきたのは、3年前に亡くなったはずの征夷大將軍・坂上田村麻呂だった。



『ロックウッド除霊探偵局』

『霊を呼ぶペンダント(上・下)』《Fス》 小学館

ジョナサン・ストラウド／作 金原瑞人・松山美保／訳

霊による事件が後を絶たないロンドン。霊を封じ込め除去するロックウッド社は子どもたち三人だけの小さな会社だ。ある日、事件解決のために幽霊屋敷に赴くこととなるが、そこで待ち受けていたのは、殺され壁に埋められた女の霊だった…。



『レッド・フォックス』《48》

チャールズ・G.D. ロバーツ／作 桂宥子／訳
チャールズ・リビングストン・ブル／画 福音館書店

カナダ東部の森で、キツネの家族が幸せに暮らしていた。ところがある日、二匹の犬の鳴き声と共に恐ろしい敵が現れた。たった一匹残された「レッドフォックス」は、厳しい自然の中で、様々な動物、人間との容赦ない闘いに身を投じていく。

